

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | シモーヌ・ヴェイユの労働観 : その主知的側面   |
| Author(s)    | 宮川, 文子  |
| Citation     | Gallia. 23 P.69-P.77  |
| Issue Date   | 1984-03-31  |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/11094/6808">http://hdl.handle.net/11094/6808</a> |
| DOI          |   |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## シモーヌ・ヴェイユの労働観

### — その主知的側面 —

宮 川 文 子

労働というテーマは、シモーヌ・ヴェイユ思想において特別重要な位置を占めている。本稿では、何故労働が重視されるのか、彼女はどのような労働観を持っているのかを知るための一助として、彼女の多くの作品中に見られる労働関係の叙述を検討し、その労働像のアウトラインをつかんで、その全体の一側面をとりあげてくわしく考察してみようと思う。

現在刊行されている著作集のうち、彼女の社会・労働観を知る上でまともだったものは次の通りである。

*Oppression et liberté* (執筆年代 1933～43年)

*La Condition ouvrière* (同 1934～42年)

*L'Enracinement* (同 1943年)

*Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu* に収録された。

*Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu* (同 1942年)

と *Le Christianisme et la vie des champs* (同 1942年)

これらの作品には、彼女の労働重視の姿勢が一貫してつらぬかれ、しかもその内容は質的に深化・発展していることがわかる。即ち1935年以降の作品には、徐々にではあるが宗教的発想や表現が見られるようになる。その上この傾向は、シモーヌ・ヴェイユ思想の開花期といわれる1941年から43年にかけての作品には顕著に現われ、深化・発展がみられる。この深化・発展の大きな契機となったのは、工場での労働体験(1934—35年)のようである。

彼女が当時書いた手紙を見ると、<sup>(1)</sup>彼女がすでに労働に関する独自の見解を持っており、その真実性を現実の中で確めたこと、そしてまた、それまでに形成した理論では包摂し得ない重い現実に触れ、それを体得したことがうかがえる。つまり工場体験は、従来彼女が立っていた知的観点ではとらえられない新しい観点へと彼女を導くきっかけになっているが、その観点とは宗教的次元のものではないかと考えられる。

以上のことから、シモーヌ・ヴェイユの労働思想は主知的側面と宗教的側面とから成り立っており、彼女は主知的労働観を打建てた後、いわばそれを補う形で宗教的労働観を形成していったのではないかと推察できる。本論ではこれらすべてをとり上げられないので

まず主知的側面に注目し、それについて考えてみたいと思う。考察にあたっては、彼女が自由の実現を理想の労働条件としている点を念頭において、まず彼女が自由についてどのように考えているかを見、次に自由のない労働についてはどうか、最後に自由な労働についてはどう考えているかを、順を追って試みていくことにする。

## I. 自由について

まずシモーヌ・ヴェイユの労働観の前提になっている自由に注目する時、モーリス・クラストンと高桑氏の自由に対する見解が参考になる<sup>(2)</sup>。彼らに共通してみられる指摘は、自由観が人間観に関係する点と、自由は人が束縛や障害に出会わずに欲求を実現していく状態と定義する点である。さらにクラストンによると、束縛や障害は欲するものの如何によって変化するから、ある人が自由を主張する時、その意味内容を正確に理解するためには、同時に想定されている意欲と束縛ないし障害が何であるかを知らなければならないのである。われわれはこの意見に従って、束縛との関係でシモーヌ・ヴェイユの自由に対する考え方をみていこうと思う。

自由に対する束縛は、自然の恐威や社会的強制といった外的なものと、さまざまな心理的抑制や抗しがたい欲望といった内的なものに大きく分けられる。シモーヌ・ヴェイユの師アランは、自由の中でも精神の自由を尊重しており、この自由を守るには、本能や情念は内的障害になり社会制度等は外的障害になるとし、それらには盲目的に従わず是非を判断し、意識的に従うことが重要だと考えていた。つまり彼にとって、自由はこれら束縛の不在にあるのではなく精神の自由を確保することであり、そのために束縛の存在を認めたと上でそれらを理性的に判断し対処することにある。そして、自由は道徳と結びついており、内在的なもの即ち善を志向する意志が自由を実現し、同時に道徳の基盤となっているのである<sup>(3)</sup>。シモーヌ・ヴェイユはこれらの教えを受けつぎ、発展させながら自分の自由観を形成していくのである。

彼女は人間の自由を考える場合、その生存条件を無視しては内容のない空虚な自由しか想定できないとみる。そしてアランに従って、自然の脅威や社会的強制といった外的束縛を人間の生存に伴う必然性として受け入れ、その必然性と自由との関係を説明して次のように言う。「生ける人間は、いかなる場合にも絶対に曲げられない必然性によって四方八方からとり囲まれており、それから逃れることはできない。しかし人間は思考するので、必然性が外部から彼に押しつける圧力に盲目的に従うか、人間が必然性について描く内部の表象に自分を適合させるか、このいずれかを選択する<sup>(4)</sup>」前者が隷従、後者が自由であり、さらに後者についてくわしくみると以下のようなものである。

人は、自分を圧迫している力が従っている不可解な法則を必然性としてとらえ、頭の中でその必然性を整理し、一定の限界内で諸物の関係を成り立たせる法則を作り上げる。そしてそれに従って意識的に行動することにより、必然性の奴隷となることを免れ自由を得

るのである。つまり必然性は、思考にとらえられ法則として再構成されることにより、行動の指針となり自由の端緒となるのである。彼女のこの自由についての見方は、「自由は自然法則からの夢想された独立にあるのではなく、この諸法則の認識にあり、そしてこの認識と結びつけられているところのこの諸法則を、計画的に特定の諸目的のために作用させる可能性にある<sup>(5)</sup>」と考えたマルクス主義の立場につながるものである。しかしマルクス主義者たちが、人間の自由を人類という立場から歴史的にとらえるのに対し、シモーヌ・ヴェイユはそれを個人の立場から構造的にとらえようとする点で、大きな違いがある。

即ちマルクス主義者は、人類が自然の圧迫から徐々に解放されていることをもって、人間の自由が進歩・発展しているとみる。それに対し彼女は、「人間集団は〔…自然の法外な力の〕重みからかなりの程度解放されたが、その代り集団が同じ様な方法で個人を粉砕するようになり、その点では集団が自然の力を受けついだかのような<sup>(6)</sup>」と言う。彼女にとって個人の立場に立つ限り、外的な圧迫は常に存在するのだから、人間の自由が進歩していくとは考えられない。むしろ、個人が思考を働かせて行動することを大幅に可能ならしめる場合に、自由があると考ええる。つまり人間は、時と場所を問わず外的束縛にとり囲まれながら、判断においても行動においても思考能力を働かせることで自由を実現すると考えるのである。そしてこの能力を駆使することに人間の尊厳性を認めるのである。

このように思考によって必然性を把握するという行為は、人に行動の指針を与える以外に、次のような道徳的自由の前提としても意味をもつ。彼女はアランと同じように、本能や情念はしかるべく統制されない場合、人間の自由にとって内的障害になると考えている。ところが彼女によると、これらの障害を統制する源泉は人間自身の内部にではなく外部にあり、外部から課せられる強制以外にはない。その強制とは、注意深い知性によってとらえられた必然性である。人は必然性を把握しそれを現実と認めることによって、自分の内部の法外な欲望を規制し、空想や情念の世界から精神を解放する。情念の影響から解放された精神は、善悪を明瞭に見分けることができるようになり、行動においてもそれを意識し可能な限り悪を避けるようになる<sup>(7)</sup>。こうして人は、道徳的に判断し行動する自由に達するのだが、彼女にとっては必然性の認識が、「徳の源泉に到達するための不可欠の条件<sup>(8)</sup>」になっているのである。従って必然性の認識は、行動の自由だけでなく道徳的な自由の前提にもなり、自由の実現に欠かせない行為だと言える。つまり彼女の考える自由を一言でいうと、必然性を認識することにより自分自身を統制し、道徳的に効果的に行動することとなるだろう。

ところで、ある対象についての必然性を認識することは、その対象に対する働きかけを可能にする。人は自然の必然性を正確に把握し一定の方法でそれに従うことにより、自然に働きかけ自分の欲する方向に導いていくことができるのである。これはシモーヌ・ヴェイユが理想とする労働の内容をなしている。即ち必然性の認識とそれにもとづく行動は、理想の労働の中核となっているのである。そしてこの労働は、働きかける対象と働きかけ

る方法とがはっきり把握されている点で、自覚的な労働である。それに対して必然性が認識されておらず、従って働きかける対象と働きかける方法とがはっきり理解されていない労働は、自由のない無自覚的な労働である。以下この自由のない労働と自由な労働について、それぞれくわしく考察しよう。

## Ⅱ. 自由のない労働

初めに労働の内容を明らかにしておこう。シモーヌ・ヴェイユが労働という時、ほとんどの場合それは肉体労働である。そしてこの肉体労働が上述の自由と結びついて展開する時、それは肉体労働の中でも特に自覚的な生産活動になると考えている。しかし同時に彼女は、自由と結びつかない肉体労働もあるとし、生産水準に応じてその自由のない無自覚的な労働がどのような形で現われるのかを解明している。即ち彼女は無自覚的な労働の考察にあたり、歴史的に経済体制を追ってではなく、生産活動を大きく二段階に分けて、段階ごとに考えている。その二つの段階とは、身分制度がなく各人がそれぞれの欲望を満たすために生産活動をしていた段階と、身分制度が生まれ支配するだけの人間と服従し生産するだけの人間に分裂した段階である。

身分制度のないきわめて低い生産水準における労働について、彼女は次のように説明する。原始人は、誰かに命令されてその強制のもとで生産活動をするわけではないから、その点では自由である。しかし原始人は、その本質において奴隷的な面がある。それは「彼自身の活動が、彼の自由にはならない<sup>(9)</sup>」という点にみられる。即ち彼は、たえず自分の生命を養うことに忙殺されており、思考を働かせて自然の必然性をとらえ、それを一定の方法で処理するということができない。彼は本能的な欲求の促しを受けて、不可解な自然の規制のもとで無自覚的な生産活動をするのである。このような労働においては、人は自然や事物を統御することができないだけでなく、自分自身を統御することもできない。それは、心然性を認識することがないため、人が動物的な欲望や情念にとらわれたままであり、自分をそれらから解放し価値ある人間として振舞えないからである。これが彼女の考える原始的平等社会における無自覚的な労働である。

次にもう一つの段階、特権階級が生まれ支配者と被支配者とに分かれた段階における労働については、彼女は集団のレベルと個人のレベルとに分けて考察している。それによると、集団のレベルでは「人類は惰性的な物質を〔崇めたてたりせず〕単に処理すべきであることを知っており、明瞭に理解された法則にもとづいて方法的に身を処することによって<sup>(10)</sup>、自覚的に労働している。しかし個人のレベルにおけると、不可解で不透明な要素が介入してくるといっているのである。彼女は原始人と奴隷や農奴とを比較しながら、原始人が物質的な欲望にかりたてられて行動し、思考を働かせる自発的な生産活動ができなかったのと同様に、奴隷や農奴は主人の強制のもとで命ぜられた動作を行うだけで、自ら考え行動するという自発性を奪われていると考えている。そして彼女は、近代的な工場で働く労働者

にも奴隷や農奴と同じような状態を見出している。しかし一般には、上役が労働者に対して持っている権力は、主人が奴隷に対して持っている権力とは違ってより小さく、その分だけ労働者は自発性を持っているのではないかと考えられる。ところが、シモーヌ・ヴェイユは両者の差違を認めず、工場労働者（1936年以前）は、奴隷と同じように自由も自発性も奪われて労働に従事しているとみるのである。では、どのような点で工場労働が奴隷の労働に類似しているのか、次にみてみよう。

彼女は、労働者に仕事をするよう促す命令の内容を鋭く分析している。それによると、命令は労働者の善意や知性や職業意識に訴えかけるようにではなく、彼らの不安や恐怖心をかきたてるようになされる。そのためそれに従う労働者は、知性や意志を働かせることもなく、解雇の不安や金銭への欲望、また時には出世への夢といったより低い動機に促されて仕事につくことになる。労働者が仕事についた時、その過程において要求される動作も知性でとらえられないと彼女は指摘している。それはオートメーション機械を相手にする場合である。彼女の説明によると、この場合方法は機械の中に結晶化されており、生産活動は厳密に定められた方法に従ってなされる。しかし労働者の方は、思考の介入を必要としない機械を前にして、その方法を理解することができない。そこで彼は、知性を働かせて機械を操作するのではなく、機械が要求する動作を実行するだけの受動的な存在になってしまうのである。

彼女はまた、機械が要求する動作に付随する別の非人間的な面にも気づいている。彼女の考えでは、リズムのある動作が人間的であり、それは人に何かが始まり終わったことを意識させる一瞬の停止を内臓している。ところが機械を前にした作業では、人は時計のように一定の調子で進むことを余儀なくされ、何事かを成し遂げた時、それを意識するために一瞬の間停止することは許されないのである。最後に彼女は、労働の評価にみられる非人間性を指摘している。それによると、評価の対象は常に物であって人ではない。一人の労働者が努力して困難をのりこえたとしても、上役はでき上がった製品に関心を示すだけで、彼の払った努力を認め評価しようとはしない。そのため彼は、努力が報われた喜びを十分に味わうことができず、また自尊心を満足させることもできないのである<sup>(11)</sup>

このように、彼女が観察した労働者は不条理な命令に従って仕事につき、不可解な機械を前に決められた動作をし、何かを生産したという実感を持たないまま生産活動をしているのである。そこでは労働者は、思考を働かせて機械のしくみを把握し自分の行動を規制するということができず、他人の命令のまま動く受動的な物の役割を強いられている。つまり、彼は自由と自発性を奪われ、人間として価値ある存在として扱われていないのである。また彼女にとって、自然や事物の必然性を認識し自覚的にそれに従うことは、情念や欲望を規制する重要な契機になるが、労働者はそうした機会を奪われ情念や欲望のとりこになっており、道徳的な人間として自分を創造することができないのである。

以上のように工場労働において、人は自由や尊厳性を奪われ知的にも道徳的にも低い段

階に置かれており、それは質的にみると、古代の奴隷の状態と大した相違はないのである。それではシモーヌ・ヴェイユは、理想の労働がどのように人間の自由や尊厳性を育てると考えているのだろうか。次にそのことを明らかにしてみよう。

### Ⅲ. 自由な労働

シモーヌ・ヴェイユは、上述のような自由のない無自覚的な生産活動—単に物質的な欲望を満たす手段にすぎず、生命を維持するためのやむを得ない苦役としての労働—の他に、自由な労働—意識化された真に人間的な行為としての労働—があり得ると考えている。彼女のこの考えは、動物と比較して人間を意識的存在ととらえるもので、それは、人間の生産活動を意識的な行為ととらえたマルクスの立場にきわめて近い。

初期のマルクスは、労働とは人間が外的自然と人間の欲望と欲望を充足する手段とをあらかじめ意識した上で、自然を変形する行為であるととらえ、また人間は労働の成果として変形された自然を前に、自分自身が実現され表現されていることを意識し、人間としての実感を持つと考えたのである<sup>(12)</sup>。つまりマルクスにとって労働は、自然を人間化する行為であると共に、その行為を通して人間が自己の諸能力を発展させる活動である。従ってそれは、自発的な意識活動による自然の再創造であり、非常に人間的な価値を持つものである。シモーヌ・ヴェイユも、労働は思考の介入によって自然を変貌させ、人間自身の物質的生活を作り上げていく行為ととらえ、高い価値を与えている。そして「人間は […] 神のように自分の存在を直接に作り出すことを許されていない局限された存在である。しかし人間は、自分の生存を可能にする物質的条件が、思考が筋肉の努力を指揮することによって生まれた作品だった場合、神の能力の人的等価物を所有することだろう<sup>(13)</sup>」と言う。

このようにシモーヌ・ヴェイユは、労働を創造活動として高く評価する点でマルクスと一致しているが、同時にマルクスとは違った視点からこの労働をみている。その違いは、マルクスが人間的な労働の条件を私的所有との関連でとらえようとするのに対し、彼女はそれを生産方法との関係からとらえようとしている点にある。彼女のこの立場は、生産方法が所有制度から独立したものであって、自由な労働が実現されるかどうかは、所有制度よりもむしろ生産方法の如何によると考えているところから、生じたものである。

彼女によると、資本主義体制であろうと社会主義体制であろうと「われわれの全文明は、専門化の上に築かれており<sup>(14)</sup>」管理者を必要とする。即ち「ほとんどすべての領域において、制約された能力の限界内に閉じ込められた個人は、自分を凌駕する全体の中に捕えられており、自己の全活動をその全体に合わせて規制しなければならず、しかもその全体の動きを理解することができない。こういう状態の中で根本的に重要とされる職能即ち単に調整するというだけの職能<sup>(15)</sup>」が必要とされる。そして現状では執行者である個人は、調整者に受動的に服従するだけである。そこで彼女は、こうした現状をのりこえ生産の分野で自由を実現するには、執行者である労働者が、生産機構に対して意識的・能動的な態度をとれ

るかどうかが重要な条件になってくると考えるのである。彼女にとって人間的な労働の条件は、生産の全過程を通して思考を働かせることができ、意識的・能動的に行動することができることである。彼女はこの独自の立場に立って、自由で人間的な労働を考察し、それが具体的には工場生産において次のように実現されるとみている。

シモーヌ・ヴェイユによると、各労働者は職業につく前も、ついてからも十分な教育を受ける。それによって彼は、自分の仕事に関する知識と幅広い技術的教養を身につけ、工場内の生産システムとその中に占める自分の位置、そして自分の企業が社会で果している役割、即ち工場で作られる製品の社会的用途をよく理解している。こうした教育のおかげで、各人は外的強制によることなく一種の内的強制に促されて仕事につくことになる。作品を生産するのに必要な努力の源泉は、金銭・出世への欲望や文句をいわさない絶対命令の中にではなく、「仲間の尊敬を得たいという欲望<sup>(16)</sup>」や社会的に必要なものを作るのだという意識の中に第一に見出される。協業即ち自分の努力と他の成員の努力との調整についても、各人は生産システムと共に自分の部署と他の人の部署との関係を明確に理解しているので、自覚的に調整を行うことになる。労働者がとり組む機械も、それは可能な限り改善されて、彼が能動的に操作することができるようになっていく。こうして労働者は、でき合いの規則や本能に依存しながらも、創意・工夫をこらすことのできる自覚的な生産活動に従事するのである。

また労働者は、自分の持ち場において意識的に行動すると同時に、企業レベルでも思考し行動することになる。彼は企業の生産計画にも参加し、生産活動を物質的利益の側面と従事する者の人間としての願望という側面との両方からとらえ、生産や労働力の調整について検討するのである。この労働者の生産計画への参加は、一つの企業内にとどまらず各企業の労働者たちが話し合いの場を持つことで、社会全体におし拡げられる。そして社会的規模で生産計画を立てることにより、企業間の相互理解が可能になり無用な対立競争は廃止される。こうして労働者は、自分の労働を通して社会全体に自覚的に結びつくのである。これが、シモーヌ・ヴェイユの考える自由で人間的な労働の具体的な姿である<sup>(17)</sup>。

この労働において、人は事物や自然の必然性と直接に向き合うことにより、自分の能力を全面的に発揮し、それらを統御するだけでなく自分自身をも統御する。つまり、必然性を認識しそれに従って行動することによって、人は自然だけでなく自分自身も変革し、本能や情念を理性の支配下におく道徳的人間となるのである。各人が労働により自分を高めれば理性を通しての相互理解が容易になり、友愛の精神も生まれる。その上個人は、さまざまな欲望や情念や夢想からなる不透明な集団生活に支配・圧倒されることが少なくなる。このようにシモーヌ・ヴェイユの考える自由な労働は、自覚的な個人が相互理解により自然や人間の再創造を目ざすと同時に、間接的に社会の再創造を目ざすものであり、あるべき人間生活を形成する原理となっているのである。



以上シモーヌ・ヴェイユの労働観のうち、主知的側面をとり上げてみてきた。この主知的労働観は、工場体験の前にほぼ完成されており、それ以後同じ観点から、具体的な面の考察が加えられていったものである。彼女はこの労働観を保持する一方で、工場体験を通して新たな労働観＝宗教的労働観を形成していく。それを考察することは今後の課題となろう。

## 注

- (1) Simone Weil, *Trois lettres à Albertine Thêvenon in La condition ouvrière* (以下CO) Gallimard, 1966, p. 15
- (2) M. クラストン, 小松茂夫訳『自由』岩波書店, 1976  
高桑純夫, 『人間の自由について』岩波書店, 1978
- (3) Alain, *Les idées et les âges in Les passions et la sagesse*, Gallimard, 1972, pp. 287—288 及び Simone Pétrement, *La vie de Simone Weil*, Fayard, 1973, pp. 73—75 等による
- (4) S. Weil, *Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale* (以下*Réflexions*) in *Oppression et liberté* (以下OL), Gallimard, 1967, p. 107
- (5) エンゲルス『反デューリング論Ⅰ』マルクス・エンゲルス選集11 新潮社, 1956, p. 107
- (6) S. Weil, *Réflexions*, p. 107
- (7) S. Weil, *Réflexions*, p. 114 及び *Leçons de philosophie*, Union Générale d'Éditions 1970, p. 144, p. 224, pp. 230—231 等による
- (8) S. Weil, *Leçons de philosophie*, p. 224
- (9) S. Weil, *Réflexions*, p. 107
- (10) S. Weil, *Ibid.*, p. 108
- (11) S. Weil の著作 *Journal d'Usine, Fragments, Lettres à un ingénieur directeur d'usine in CO, Réflexions* 等による
- (12) K. マルクス, 城塚登, 田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店, 1969, pp. 84—106
- (13) S. Weil, *Réflexions*, p. 117
- (14) S. Weil, *Ibid.*, p. 63
- (15) S. Weil, *Perspectives, Allons-nous vers la révolution prolétarienne? in OL*, pp. 25—26

(16) S. Weil, *Réflexions*, p. 132

(17) S. Weil の著作 *Réflexions, La Condition ouvrière in CO* による